

たて、疑ふときは其重き方の「カ」を用ゐて

心魂は死せざるもの「カ」

世の中は常なきもの「カ」

とやうにいふも、其語勢によることなり。而して、此「カ」を轉じて、名詞の下に置くときは「カ」を「ヤ」に變じて。

心魂や死せざる。

世の中や常なき。

なほいものは、上下連聲の便によるものなるべし。かくいふも、其形の同じからぬより、水「ヤ」流るゝの「ヤ」は「水は流るゝ」の「カ」の轉置にはあらじと拒むものあるべけれども、先の「水は流るゝ」の「ヤ」や「ど」水は流るゝもの「カ」の「ヤ」「カ」の同義なる「ヤ」「カ」の本原の同一なるを思ひ合せて、熟く味ひ見ば、自覚るところあるべし。

さて截るゝ動詞につきて「見ゆ」「ヤ」流るゝ「ヤ」は轉置して「水」「ヤ」流るゝ「月」「ヤ」見ゆ「や」とやうにいふ例なしといへども、同じ「ヤ」の「あり」につきて「我は何なり」「ヤ」露は何な

り「ヤ」露といふを轉置して「我」「ヤ」露になり「露」「ヤ」にありなほいふ例あることは、

泪川、ちがすねさめりも、ある物を、はらふばかりの、露「ヤ」なになり。

梅もみな、春ちかしとて、さくものを、まつ時もなき、われ「ヤ」なになり。

にて知るべし。但、この歌どもは、玉の緒に、變格として擧げたるにて、且、其「ヤ」は、從來詠歎の意もて解きたるなり。されども、此歌どもを「云々なり」「や」「や」を轉置せるものと見るときは、歌意よく聞ゆるにても、必、問の「ヤ」の轉置なること疑ひなし。さりながら、詠歎の意あることは、元「ヤ」の本原の、詠歎の聲あれば、勿論のことなれば、其意もて説くも、強、誤まれりといふにはあらず。既に、右の如く、問の「ヤ」とするときは、同じ變格中の、

戀しきも、おもひこめつゝ、あるものを、人にしらるゝ、なみだなになり。

おもひ出て、おどづれしける、山彦の、こたへにこりぬ、心なになり。

君こふる、涙にぬるゝ、わが袖と、秋のもみぢと、いづれまされり。

よの人の、いみけるものを、わがために、なしといはぬは、たれがうきなり。

夏のよの、月まつはどの、手すさびに、岩もる清水、いくむすびしつ。



高砂の、そのへのさくら、たづねれば、みやこのにしき、いくへ霞みぬ。  
などの歌をもは、結尾につく、問の「ヤ」を略けるものにして、亦一の省略法なりと見ば、其意、明なるべし。

何の轉置

何の轉置「水は、いかにして」カ「流るゝ〇〇」こは、玉の緒「何」の格なるが。

君をのみ、思ひこしぢの、しら山は「いつか」は雪の、さゆる時ある。

ことならば、思はずとやは、いひはてぬ、なぞよの中の、玉だすきなる。

などの歌にあたり。

抑玉の緒には「イッ」ニ「マレ」ニ「イッ」ニ「サヨ」ニ「イッ」ニ「マレ」ニ「タガ」ニ「イカ」ニ「イカチ」ニ「イカヨ」等の詞あるものは、皆連く詞もて結ぶ格と見て、其證歌を擧げられたり。されど、これらの「何」の類のみにては、係りにはならで必これらの詞に「カ」「ツ」なぞいふ問ふ意の添はらされば、連體言には結ばざるが如し。そは、玉の緒の「何」の部、證歌をも見て知るべし。但「サマ」「ナツ」「タガ」「イッ」には、「カ」の添はざるも交れ、と「ナド」は「ナヨツ」の約されば、別に「カ」「ツ」を要せざることを勿論のことなり。又「タガ」「イッ」とあるは、皆結尾に「ツ」「カ」の省かれたるなれば、皆、同じく「ツ」「カ」の添はれるものと見

べきなり。されば、此係りの連體言もて結ぶは、何等の詞にはあらで「ツ」「カ」にあるが如し。然るに、玉の緒には「何等」の詞より、係れるものとして、「何等」の詞あるもの、末は、必、連體言に結ぶこと、定められしより。

淡路島、かよふ千島の、さく聲に、「いく」夜寐さめぬ、須摩の關守。

年へたる、宇治の橋もり、ことゝはむ、「いく」よにありぬ、水のみなかみ。

なぞある「カ」のなきものを、悉、變格の中に加へらるゝに至れるなり。但、この「何」のみにて、截斷をもて結べるは、皆、問の意に、其結尾の「ヤ」の辭を省けるものと見ざるべからず。

コソの轉置

右にて、轉置法と、省略法との二法の概略を知るべし。又、夫の「何コソ」といへば「云々スレ」といふも、亦、此轉置法と、省略法とを用ひて、簡約にせるなり。ろは、元、「コソ」といふ辭は、

櫻の花「コ」ハ美しければ、見まほしきもの「ツ」。

櫻の花「コ」ハ美しければ、他は然らぬもの「ヅ」。

なぞいふ「コ」「ソ」の合して、名詞に屬きたるが本にて、其「コ」「ソ」の名詞の下に屬くと



きは其「コソ」事物を指すことの甚強きより、自然、事物を多数の内より、擇り取る意となり。是れに由りて、「云々ナレド」「云々ナレバ」といふ、上句の意を、下句に接続する語に續くる場合多かるより、「コソ」へ「コソオモ」などいへば、「ド」若くは「ハ」以下を略するも、大方は、其意の悟らるゝが故に、之を省きたるを、歌は、辭句の簡約を貴ぶが故に、常に、慣用して、「コソ」といへば、必、かく已然形に結ばされば、能はざるものゝ如くなれるならん。かくいふも、何の證ありてといふもあらんが、そは、文章には「コソ」といひて、下に續くる例いと多くて。

京のを、も、さ「ころ」は、おもふらめども、云々枕草子かやうの事「ころ」かたはらいたき物のうちに入れつへけれど、人毎、あおとしそと侍れば、いかゝはせん上。かく見る人々も、云々「こそ」は、覺えけめど、かくしもてゆくは、云々上。驚の、老いたる聲にて、彼似せんとおぼしくうちろへたる「こそ」にくけれど、またをかし上。みかどは、後、御有様いと所せき物に「ころ」あれど、同じくは、いとめてたうこよき事ぞかしとまで思召つゝ、ぞ過させ給ける物菜。

尙侍の御有様「ころ」猶めでたういみじき御事なれど、只今、哀なる事は云々上。

二人は被越テ辛ソト、思給ドモ、物語今昔。

隔テ「候」ツレ、知ラセ給ヲ「コソ」、思ヒ候ツレ、上。

たゞ、御なみだのみ「こそ」、こぼさせ給へば物菜。

三年に「こそ」は、あらせ給ぬれば、いかさまなりとのみ、見えさせ給へり上。

あふさかは、あつまぢと「ころ」まゝ「上」か「心」つくしの、關にぞありける後拾遺。

以上「ドモ」に係る例、此外數多あり。

こよひは、いたちのまど「こそ」さゝ給ひけるは、云々物語。

この御うしろみし給とおぼして「ころ」は、山ざとには、この君をすまはせ奉り給へ上。

今「ころ」は、宮このあまたし給ふわざ、時々は、こゝにもして給へつはや上。

よろこびに「ころ」いのりなぞするとき、さいはいといふ事あるはどて上。

したに「ころ」人のこゝろも、うつろふを、いろに見せたる山さくらかき新古今。

たえず「こそ」つかへしものを、わが身よに、なごよとむらん、關のふぢ川新千載。



せきいれたる、名こそ流れて、とまるども、たえず見るべきたきの糸香か、射集。

以上は、種々の續く詞に孫れる例。

右の諸例にて「コソ」は、總て下に續く詞につゞく辭なるを知るべし。元「かくコソ」  
と「へば」「ドモ」「ハ」などに續くが普通あるを、既に「コソ云々ケレ」「ハ」などへば、  
「ドモ」「ハ」など言はでも著きより、略きたるが、其略ける方却て、普通の事となり  
て續く方は、却て怪しき心地するやうになれるより、「コソ」といへば必「ケレ」  
「ハ」など、結はされば、法に叶はぬもの、如くなれるなり。なほ其證をいは「コ  
ソ」といひて「ケレ」「ハ」と結べる歌をも、總て「ハ」「ドモ」などの意を添へざれ  
ば、聞えざるが多きにて、明あり、例へば、

春の夜の闇はあやなし、梅の花色こそ見えぬ、香やはかくる。  
よるべなみ、身をこそ、遠くへだてつれ、心はきみが、かげとなりなき。

此歌などの「見えぬ」へだつれの下に「ド」を添ふれば、能く聞ゆると、  
をりつれば、袖ころにはへ、うめの花、ありとやこゝに、驚のなく、

こよひこん、人にはあはじ、たなばたの、久しきはとに、まちも「ころすれ、

關係の事

の「にはへすれ」の下へ「ハ」を添へて聞ゆるなどにて、其趣を覺るべし。

上來、説くところによりて、省略法と、轉置法との二つを以て、言語を簡約にする  
状態を知ると共に、從來稱するところの係、結の法則は、此二法によりて生じた  
ることゝ知るべきあり。されども、唯、由て來るところを主として、其法を説くに  
あらず、故に、其法を學ばんとするものは、普通の文典、若くは、詞の玉の緒に就き  
て、學ぶを要す。今本章論ずるところの概要を摘記して、其略則を示さんとす。

凡、完結せる詞章は、必、主格の「徒」「ノ」「ハ」「モ」より其意、全章に係り、其末は必、斷る  
、詞名詞又助詞助の截斷形等もて結ぶを通則とす。されども、辭句を簡約にする爲め、省  
略法を施し、結尾の虚體言、助辭等を省くことあり。然るときは、往々、連體形に  
結ぶ事もあり。又、其意を強勁にする爲め、轉置法を施し、結尾の「ツ」「ヤ」「カ」を「ハ」  
「徒」の位に轉置する事あり。然るときは、必、連體形、若くは名詞もて結ぶを例と  
す。又、「コソ」上にある時は、其意、必「ハ」「ド」「モ」の已然接續詞に係るを常とす。か  
ゝる時は、多くは、省略法を以て「ハ」「ド」「モ」以下を忍するが故に、已然形の詞に  
結ぶを例とす。



附言

卷首より前章に至るまで、説き來れるところによりて、讀者は、我國語の原生より、世代を逐ひて、徐々に發達し遂に、一種高等なる言語を完成せる状態は、勿論語原の分類言語の系譜、語尾の屈曲活用圖の成立、形容詞の語尾の本義、助辭の來源、係結の起因等殆ど一原理によりて解説し得べきものたることは、略認諾するに至れるならん。然れども、著者の固陋を以て、前人未到の處に之く、間、新事實に遭逢することなきに非ざるも、井蛙の識蠶管の見、必や、實相を誤認し、真象を遺漏せるもの少からざるべし。然るに著者既に、老朽に瀕して、再往期し難く、勇進の望絶ゆ。希くは、少壯可畏の讀者、幸ひに、著者が僅に認め得たる一蹊徑より進みて、能く、國語の内景を精察し、著者が誤認せるところを正し、遺漏せるところを補ひ、以て、後來、廓然たる一新境を、言語界に闢くことあらんことを。

國語湖原終

正誤

頁	行	誤	正	頁	行	誤	正
十一	十二	音聲シ	音聲ニ	九十六	四	話	活
十八	十四	コロ	コ、ロ	九十六	四	見、羨氣	見、羨氣
二十六	七	往處	住處	九十八	一	マテ(立)る命	マテ(立)と命
二十七	一	亦六法	前の六法	九十八	一	するは即立	するは即立
三十一	十一	醉フ	醉フ	九十九	四	いふの動詞	いふに動詞
三十二	十四	悴ム	悴ム	百八	十四	貴人は	貴人に
三十四	七	「ゴト」	「カゴト」	百八	十四	貴人は	貴人に
四十六	七	陶品	陶器	百十一	十	合	令
四十七	三	を付りて	をはりて	百三十一	四	自	自
五十	二	香氣るの	香氣ある	百三十六	十	船	船
五十二	七	(立ツの「ツ」)	(立ツの「マ」)	百四十七	四	いひしが	いひしを
五十六	十四	如よきり	如きより	百六十四	十四	遠き過去に	遠き過去近き過去に言ひ分
六十四	六	本末	本末				
七十一	二	一ト唯	一に唯				
七十九	八	ア、ワ、	ア、ワ、				
九十五	一	「ツク」	「ツケ」				



明治卅二年三月廿三日印刷  
明治卅二年三月廿八日發行

定價金六拾錢

著者兼  
發行者

大 矢 透

東京市麻布區飯倉狸穴町  
五拾八番地

印刷者

松 澤 珏 三

東京市麴町區下六番町  
十七番地



印刷所

同 勞 舍

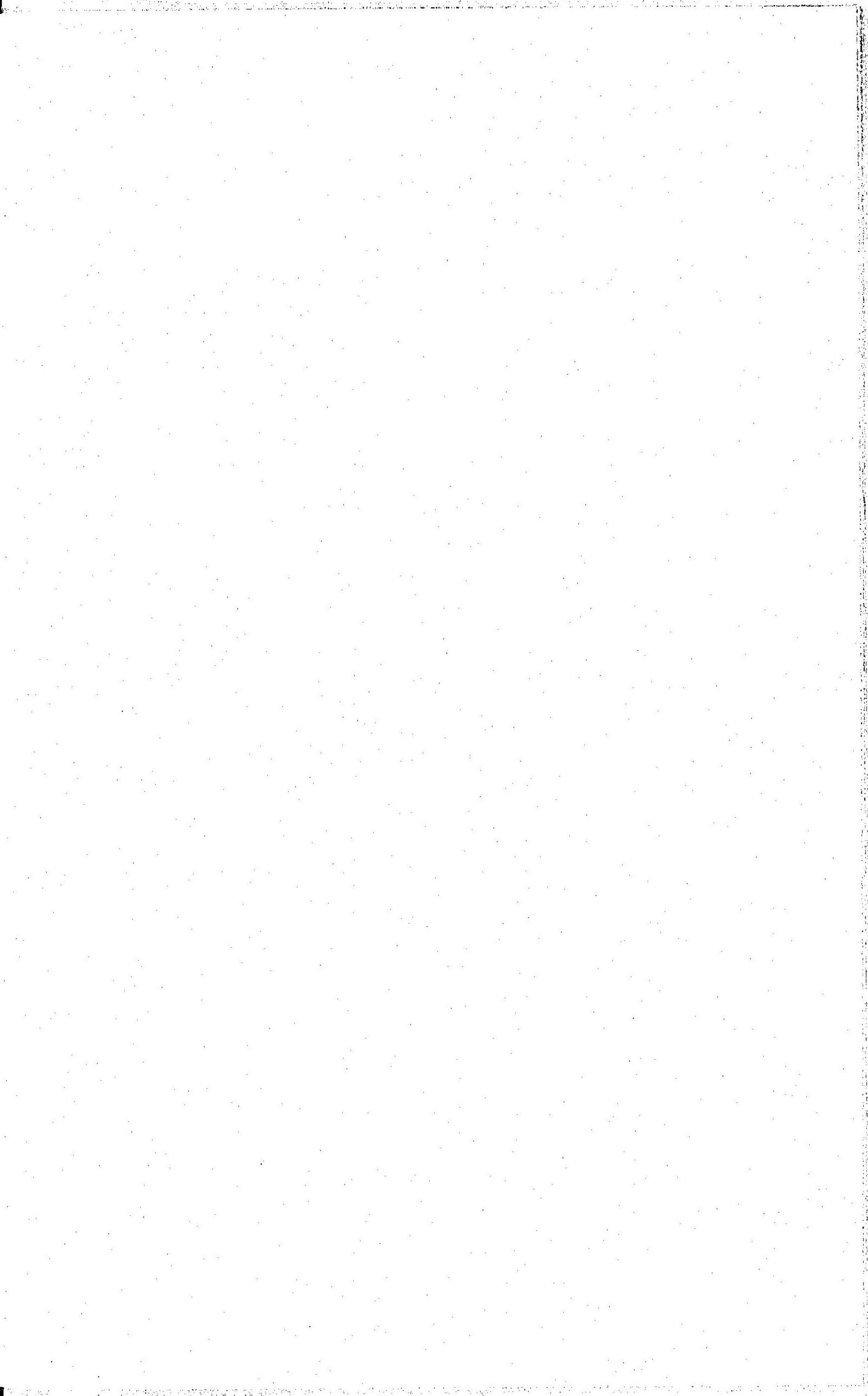
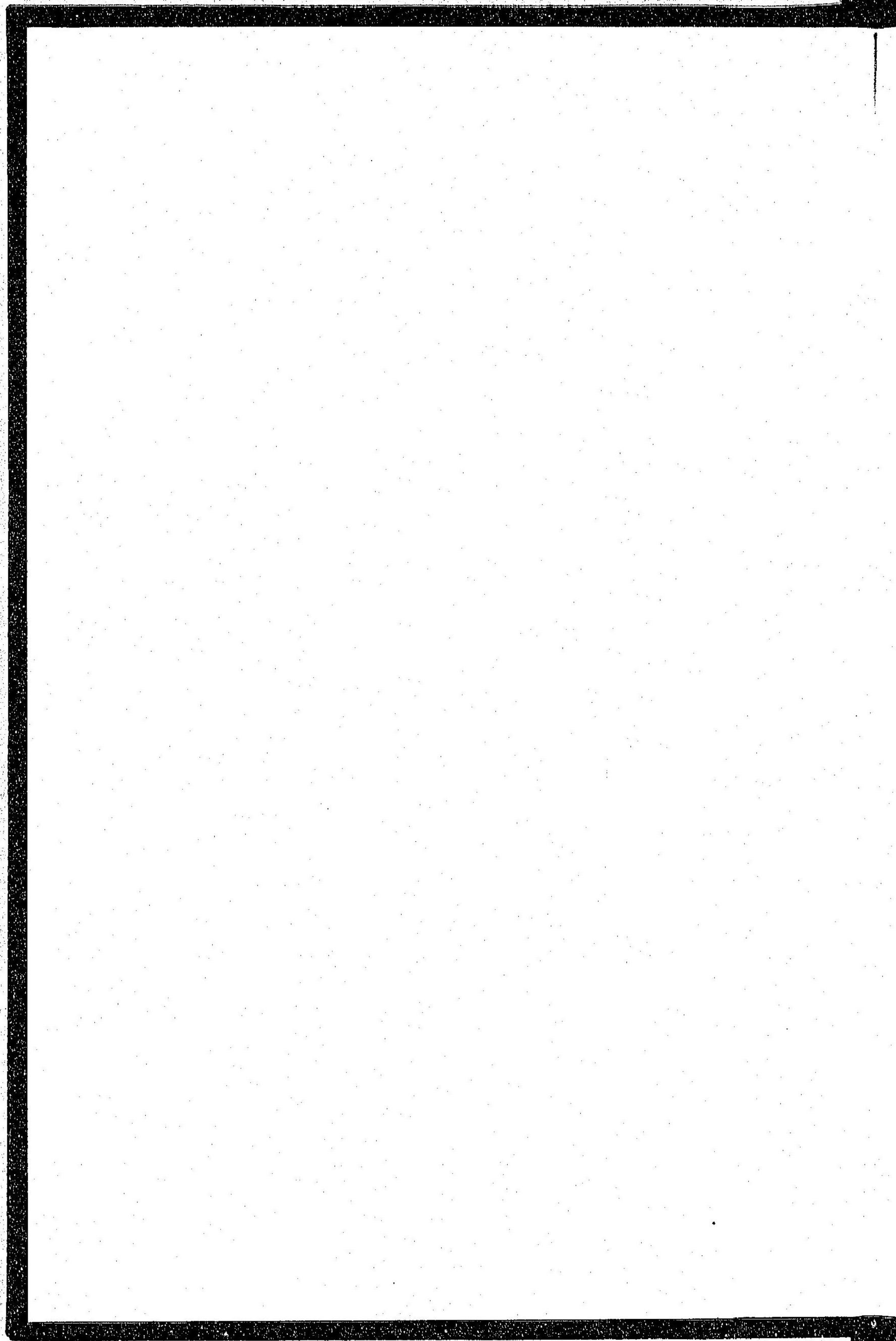
電話本局(三六九番)  
東京市麴町區下六番町  
十七番地



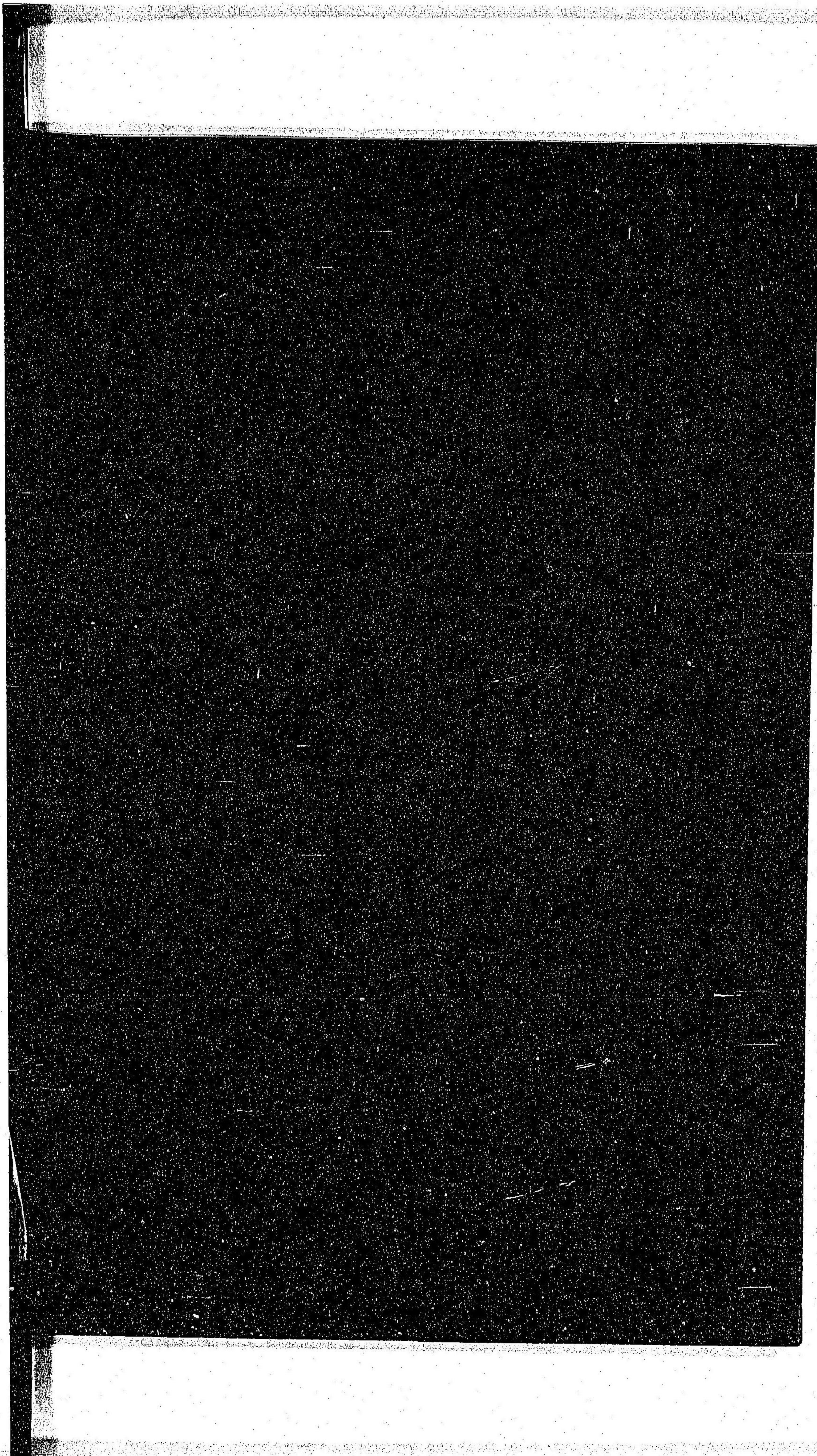
# 大賣捌所

熊本市新二丁目	鹿兒島仲町	京都市河原町通	大阪市東區備後町四丁目	全	全	全	全	全	全	全	全	全	全	東京市神田區一ツ橋通町
長崎次郎	吉田幸兵衛	大黒屋書舖	吉岡書店	服部書店	中西屋書店	林平次郎	目黒甚七	小林喜右衛門	水野書店	大倉書店	丸善書店	有斐閣書房		











810.1  
0952k

076894-000-9

810.1-0952k

国語溯原

大矢 透 / 著

M32.3

DAC-0057





